

# 高杉晋作伝形成過程の概観

稲益 あゆみ

## はじめに

高杉晋作は、幕末に活動した「維新志士」の一人として、現在広くその名を知られている。天保10(1839)年に長州藩の武家である高杉家の嫡男として生まれた晋作は、吉田松陰の松下村塾で学び、後に奇兵隊の創設、馬関拳兵、幕長戦争の指揮など幕末維新期の長州藩において重要な役割を果たした。その生涯は、動乱の中を生き、時代を明治へ動かした人物のひとりとして小説やドラマなどにも数多く描かれ、晋作にまつわる逸話や伝説も現在までに数多く語られてきた。言わば維新の「英雄」の一人として、世間での人気も高い。

しかし、晋作はいつ頃から、どのようにして「英雄」として多くの人々に知られるようになったのであろうか。そこには晋作以後、各時代の人々が明治維新を振り返り、様々な思いや思惑を持って晋作を語ってきた過程があるはずである。そしてその過程を追っていくと、晋作イメージは常に一定のものではなく、晋作を描く様々な立場の人々や、時代・社会状況の変化に伴って変遷していることに気付く。

明治以降、人々にとって晋作とはどのような存在であり、晋作像はどのような変遷を経て現代に至っているのか。また、そこにはどのような人々や、時代・社会状況が影響を与えてきたのであろうか。本稿では、明治から現代までのいくつかの晋作に関する伝記を取り上げ、変遷していく晋作像の大まかな流れをつかみたい。

## 1. 「英雄」晋作と高杉晋作研究の現在

高杉晋作に関する研究は、晋作の死後、比較的早い段階から行われていたと言える。旧長州藩主である毛利家は近世以来の藩史編纂事業を引き継いで明治初期から歴史編纂事業を行っており<sup>1</sup>、その過程で晋作に関する史料の整理や簡易履歴の作製も行われていったものと思われる。これらを晋作研究のはじまりと捉えることができるだろう。以後、現代まで各時代で晋作に関する史料の分析等、多様な研究が行われてきた。その中で特に近年の研究を見ると、そこにはある共通した傾向が見られる。昭和40(1965)年に『高杉晋作』を刊行した奈良本辰也氏はそのまえがきの中で次のように述べている。

それにまた、小説やテレビで形象化された高杉晋作像とも、私は対決しなければならなかった。

そういう彼を、史実を追いながら伝記として再現することは、かなり難しいことだった。<sup>2</sup>

ここで奈良本氏は、明治期以降語られてきた「英雄」像をもとに小説やドラマなどで語られた晋作像が、伝記を書くことを難しくさせるものであったことを述べている。これまでに語られてきた晋作伝の中には、史料上真偽が不確かなものや明確に書かれていない部分がある。小説やドラマならば自由に書くことができるが、奈良本氏は「私の想像どおりに書いてみようという誘惑と、しかし歴史家にはそのような勝手なイメージは許されないという厳密さとのあいだで、いささか動揺し、ついにその後者の歴

史家に帰ってゆくことで落ち着ることが多かった」<sup>3</sup>と書いている。

奈良本氏の言葉に表れているように近年の晋作研究では、それまでにつくられてきた晋作のイメージと対峙し、歴史的視点からより史料に忠実に晋作を書いていくという方法が強調されている。

平成14(2002)年に伝記『高杉晋作』を刊行した一坂太郎氏は、奈良本氏以上に「英雄」晋作像を強く否定した。一坂氏はあとがきにおいて、「晋作がたった一人で時代の先を見て、走った「英雄」「スーパーマン」と印象付けられたら甚だ不本意である」<sup>4</sup>と述べており、伝記の中では、これまでに語られてきた開明的晋作イメージとは対照的な、晋作の封建的・保守的な側面も記載している。更に一坂氏は、維新後、「生活の危機におびえる萩士族たちにとって「高杉晋作」は「秩序の破壊者」でしかなく、憎んでも余りある存在だった」<sup>5</sup>とも述べ、晋作が幕末の長州武士たちに及ぼした負の影響をあえて強調している。そのような側面も含めて晋作の事跡を歴史的に評価し、晋作と言う人間を書いていると言える。

一坂氏を始めとする近年の諸研究<sup>6</sup>においては、これまでに語られてきた根拠の確かでない晋作に関する逸話や伝説を剥ぎ取り、晋作の実像を史料から明らかにするという作業がより厳密に行われるようになってきている。そしてその中の晋作は時代を超越した先見の明をもつヒーローではなく、封建時代の武士として保守的な側面やその行動のもたらした負の影響にも光があてられるようになった。近年では晋作を彼の生きた時代や社会と関連付けながら、一人の人間として評価していく動きが活発になってきていると言えよう。

しかし、多くの研究者が対峙し、晋作の実像を覆い隠してしまうとした晋作イメージは、どのようにして形成され、現在まで伝えられてきたのか。この問題についてはこれまでの研究においてあまり注目されてきたとは言えない。

青山忠正氏は著書『高杉晋作と奇兵隊』において、下関に建つ高杉晋作の顕彰碑について触れ、そこに描かれたストーリーは大方「虚構」であり、それは「日

本近代国家が確立してゆく過程で、いわば建国神話のような意味合いで編み上げられてゆく物語のひとつ」<sup>7</sup>と述べている。特に晋作の場合には、「維新の勝者」たる長州藩の人物であるが故に、その顕彰やイメージの形成には民衆や地域のレベルだけでなく、国家全体の状況や歴史像の形成過程をもそこに関わっていることが予想される。晋作イメージの形成を考えることは、晋作研究の分野だけでなく、近代から現在への維新観、歴史観の形成全体を考える上でも興味深い対象となるのではないだろうか。

このような問題意識のもと、本稿では明治以降、人々が晋作をどのように捉え、そしてどのように表現してきたのかという点について、大まかな流れをつかみ、その一端を考えることを目的とする。次章では、伝記を中心に晋作像の変遷を追ってみよう。

## 2. 高杉晋作伝の変遷

### 2-1 明治初期の晋作伝

高杉晋作の名がいつ頃から広く世間に知られるようになっていったかは、現在のところはっきりとはわからない。青山忠正氏によれば、晋作の死の直後、幕長戦争を勝利へ導いた指揮官として長州を中心にその名は広まっていたという<sup>8</sup>。

確かに明治の初期の段階で、高杉晋作の知名度はある程度高かったようである。一坂太郎氏は先に紹介した著書<sup>9</sup>の冒頭で明治8(1875)年の『評論新聞』に掲載された、晋作復活の記事を紹介している。

記事によると、高知県のある人物が長門赤間ヶ関(下関)に滞在中、死んだはずの高杉晋作に出会った。晋作へ今までどこにいたのかと尋ねると、「支那ニ往キ支那人ト偽リ五洲ヲ廻國シ夢中出テ又夢中ニ帰レリ」と答えた。また、晋作が不在の間、「天下は駿旬として中興の勢い」があるという、晋作は「百万ノ蒼生未ダ春ヲ知ラズ、共ニ日出度春ヲ見ル日モタアリマセフ」と笑ったという<sup>10</sup>。

一坂氏も述べているように、この記事のいう晋作の生存は当然事実ではない。源義経や西郷隆盛などにも見られたような、「英雄不死伝説」と同様のもの

である。

このような記事が書かれた背景について一坂氏は、明治政府の急激な改革によってしわ寄せを受け、政府に不満を募らせていた人々の存在を指摘している。一坂氏は、彼らの持つ、「いまや政府の重鎮として権勢を誇る山県有朋や伊藤博文、井上馨ですら幕末の頃は頭が上がらなかった晋作という男が復活してくれたら、どんなに素晴らしい日本にしてくれるだろう」<sup>11</sup>という夢が生んだ晋作の復活であったと述べている。晋作が再び活躍し、やがて「共に春を見る日」が訪れるという願望が晋作を復活させたのである。この記事からは、すでにこの頃、人々の意識の中に新しい世をもたらす「英雄」晋作イメージが存在していたということができよう。

また、同時期に書かれた偉人列伝の中にも晋作の名を見ることができる。記事と同じ明治8(1875)年に出版された河邨敬一郎『近世正義人名像伝』<sup>12</sup>を例に見てみよう。

この列伝では、尊皇攘夷、倒幕運動家や維新殉難者などを中心とした幕末の人物たちを取り上げ、肖像画とともにその人物の詩歌文章、小伝を掲載している。序文において著者は、幕末の「正義」ある人物を知ること、後世の人々がその心を継ぐことを望むと書いており、晋作はそのような人物のひとりに数えられていたようである。

この列伝中の高杉晋作の項には次の小伝が掲載されている。

長州萩藩の士なり、天性勇猛にして胆略ありて能く奇兵隊を御し、国難に当りて粉骨碎身、山縣狂介等と謀り兵を赤馬か関に起して俗論党を鏖殺し、ふたゝび士気を震起して三国老の吊ひ軍をなしてんそ、毎戦衆に先立て水火を踏み干戈の中をくゞりて、遂に志を違うし国家の回復をなしたるは真に英雄の偉功そ賞すべし<sup>13</sup>

短い文章であるが、奇兵隊の創設や下関での決起という現在も評価されている晋作の重要な事績が書かれている。一方で下線部を見ると、戦の際、軍の

先頭に立って戦い、その志を全うして国家を回復したことは真の英雄の偉功であると書かれており、この段階では後に注目されるような馬関決起による藩論統一や、幕長戦争という晋作の事績そのものよりも、危険に立ち向かい志を果たしたという点の方が強調され、やや単純な英雄伝として捉えられている印象を受ける小伝となっている。

また、ここに記された馬関拳兵と奇兵隊についての記述は、その後の晋作に関する語りの形式と比較すると、少々異なる点が見受けられる。後述するが、現在までに語られてきた晋作伝の多くにおいて、馬関拳兵では軍監であった山県有朋率いる奇兵隊をはじめとする長州藩の諸隊が当初晋作に賛同せず、決起に賛成しなかったことを強調する語り方がよく見られる。実際に、奇兵隊は晋作による伊崎会所襲撃が成功した後に戦いに参加し、晋作の決起に加わっている。決起を決めた晋作が、奇兵隊や諸隊の多くが反対する中、わずかな人数で兵を挙げ藩論の転換を成功させたというストーリーは、晋作の事績をよりドラマチックな「英雄」伝にもしてくれる語りであり、現在でも伝記や小説など様々な晋作伝の中でこのようなイメージは強く残っている。

しかし、この小伝においては、晋作は奇兵隊を御し山縣狂介(有朋)らと謀り馬関に兵を挙げたと書かれており、諸隊の援助なくして決起を行った高杉晋作というストーリーはここには見受けられない。このような点を見ると、この時期の晋作に関する語りにおいては、現在へ続く晋作伝の形式はまだ定まっていない段階であったと考えることができる。

一方で、ここに挙げた二つの晋作評を見るだけでも、この段階から晋作が人々に維新の「英雄」のひとりとして認識されていたことが窺える。晋作の名が広まり、様々な人々に語られていく端緒はこの時期にすでに芽生えていたと言える。

また二つの晋作に関する語りを見ると、『評論新聞』においては、明治新政府への不満からやがて再び新しい世をもたらす人物として晋作が語られ、また『近世正義人名像伝』においては晋作の「正義」を後世の人々が知り、引き継いでいくことが望まれている。

た。社会を変革させ新しい世をつくる人物としてのイメージや、後世の人々への模範となるべき人物としての高杉晋作というイメージはこの時期から語られ始めていたという事がわかる。

## 2-2 明治中期の晋作伝

その後、晋作に対する顕彰活動は、長州藩をはじめとする旧藩関係者や、明治政府、そして宮内省などによっても活発に行われていくようになる。明治24(1891)年には多くの維新志士等への贈位が一斉に行われ、この時には晋作に対しても正四位が追贈されている。

政府や宮内省における維新史の調査、編纂事業は明治新政府樹立直後から行われてきていた。維新史の編纂・顕彰は政府にとっても重要な事業のひとつだったのである。政府や宮内省はこの事業のため、明治初期より自藩・自家の歴史編纂事業を行っていた旧大名家へ史料の編纂・提出を命じている。旧長州藩主である毛利家も、近世以来の歴史編纂事業を引き継いで行ってきた事業を、政府や宮内省の命を受けて更に拡大した。晋作に関する事績調査や長州藩維新史の編纂もこのような流れの中で更に進められていったと考えられる。

このように明治10～20年代にかけて維新史の編纂・顕彰が活発化していく中、明治26(1893)年に、晋作の伝記として初期のものである、江島茂逸著『高杉晋作伝入筑始末』(以下、『入筑始末』)が刊行されている。

これはその題からもわかるように、高杉晋作の筑前亡命前後の事績を書いたものである。晋作は元治元年(1864)の四国艦隊との講和の後、「俗論派」と呼ばれた保守派勢力の台頭により命の危機にさらされ、筑前へ身を潜めており、帰国後下関で「俗論派」打倒の兵を挙げている。

著者の江島茂逸は、旧福岡藩主黒田家の歴史編纂員を務めた人物である。『贈正四位中村圓太伝』や『維新起原大宰府紀念編』等福岡藩維新史関係の著作が多く、「福岡の歴史の「語り手」というべき人物」<sup>14</sup>とも評価されている。『入筑始末』の緒言や凡例に

は、江島が福岡藩の古老から維新期の話聞き、彼らの節義や悲しみ、苦節を慕って筆を取ったことが書かれており<sup>15</sup>、福岡藩士の維新回想がこの伝記の主要な資料となっていることがわかる。また、高杉晋作伝については旧藩の記録文書を蒐集して執筆にあたったことが記されており、毛利家編纂所の史料等も利用して書かれたものである。

幕末期の福岡藩では、月形洗蔵、早川勇らが登場し、幕府の第一次長州征伐の際には、五卿の大宰府移転を成功させ長州征伐軍を解兵させるなど活発に活動していた。しかし、その後藩内での佐幕派と尊攘派の対立の末、慶応元年(1865)藩主黒田長溥が尊攘派を弾圧<sup>16</sup>、彼らに対する肅清が行われ、以後福岡藩は薩長を中心とした明治維新の動きからは遠ざかってしまった。結果として福岡藩は維新期に大きく活躍する機会を逃したと言える。江島の歴史編纂・執筆の背景には、維新後、国家の中心に入ることが出来ず、注目されなかった福岡藩の藩史、維新史を世に広めようという意識が強く存在しており、このような意識は『入筑始末』中にも同様に表現されている。

江島は凡例の中でこの伝記を執筆した目的について二つの事を挙げている。一つは、高杉晋作の英雄的な態度と、そして福岡の志士俠商が家財を投げ打ち身を国家の犠牲に供した義気を公にすることで人々に裨益することを望むという点である。『入筑始末』中には、高杉晋作の事績とともに、晋作と福岡藩志士や地元民との交流が描かれている。また、晋作の行動の裏で行われた福岡藩士の活動にも多く字数を割いている。福岡藩の維新における働きを主張しようとする意識は『入筑始末』中に顕著に現れていると言えよう。

更に、江島は執筆のもうひとつの目的として次の事を書いている。

書史の薩長和解を記せし者あれども多くは徒に其末を記し或は往々事実を誤る所あり、其和解の原由は高杉居士等の秘計に属せし事なるを以て今編末に掲載すべし<sup>17</sup>

この伝記において、薩長の和解について正しい事実を明らかにすることが江島にとってもうひとつの執筆目的であった。そのために、『入筑始末』中では、伝記の最後に「薩長和解の概略」という項目を設けてそのことを記述している。

ここで江島が採用しているのは、福岡藩士の仲介による高杉晋作と西郷隆盛が会見と、土佐藩士土方久元・中岡慎太郎と月形・早川ら福岡藩士による薩長和解の主張によって、薩長同盟の基礎が作られたという説である。江島の記述によれば、福岡藩士月形洗蔵、早川勇らは文久3年(1863)より薩長和解論を唱えて各方面へ周旋を行っていたが、薩長の軋轢は増すばかりであった。そのような中、元治元年(1864)に西郷が筑前に入った際、早川、月形が西郷へ薩長和解を提案した所、意外にもすぐに賛成した。その後月形は長州へも周旋を行い、下関で晋作と西郷の会見がなされた。会見では薩長の和解と、いずれ福岡、薩摩、長州の三藩共同で幕府へ対抗し京都を守護する兵を挙げることが約束されたが、この和解は幕府及び他藩に知らせず三藩が共同して倒幕の兵を挙げるまで秘すこととした。

この後、晋作の挙兵によって長州藩は武備恭順路線へ転換しいよいよ三藩での出兵となったが、その時幕府へ情報が洩れ、出兵を延期しているうちに福岡藩では乙丑の獄によって尊攘派が処断されてしまう。このため福岡藩は薩長和解と倒幕の計画を果たすことができなかったと言う。

更に江島は、この後福岡藩と同論であった土佐藩の土方久元、中岡慎太郎が薩長和解を進め、そこに坂本龍馬が加わって薩長同盟が成ったことを書き、次のように評価している。

世に当時薩長の調和を以て坂本の主唱せし如く記載したる書のあるを以て世人は此功を坂本に帰するが如くなれども土州人にして始めより尤も此事を主唱したるは土方石川<sup>18</sup>の兩人にあるを知るべし、特に高杉が最初に此薩長調和の事を以て大に之を秘したる所あるは他日大に事を成すの基礎を鞏くせんとの深意ありしなり、

依て薩長和解の成立せしは素と大に高杉の一身に関係ありし所なれば爰に記載して当時の事実を詳にし後の史学家をして聊か其顛末を知らしむる者なり<sup>19</sup>

江島は世間では薩長同盟について坂本龍馬の功績とされるが、実は土方久元・中岡慎太郎の功績と、それ以前に行われた高杉晋作と西郷隆盛の会見があったことを主張している。そしてその根底には、早い段階から薩長の和解を主張し、晋作と西郷の会見を仲介した福岡藩士たちの功績があったことを世間に知らせたいと言う江島の思いが表れていると言える。

この「薩長和解」の語りに象徴されるように、江島は『入筑始末』において、晋作の伝記を描きながら、埋もれてしまった福岡藩の維新史を世に広めていくための語りを展開した。晋作と西郷の会見は、現在の研究ではそれを否定する説が有力となっており、江島の語りがすべて事実だという事はできない。しかし『入筑始末』は、この後に刊行されるいくつかの晋作伝でも参考文献として利用されており、高杉晋作イメージの形成に影響を与えた存在のひとつと言えるだろう。江島による晋作伝を見ると、晋作が維新へと時代を動かした重要な人物としてその名を高めていった背景には、旧藩関係者による自藩の功績の主張という目的による語りの影響も存在したことがわかる。

次に、明治30年(1897)に刊行された渡邊修二郎著の『高杉晋作』を見てみたい。これは福山藩出身で歴史や日欧文化についていくつかの著作を持つ渡邊の執筆した晋作の伝記である。江島の『入筑始末』は内容を筑前滞在時の事績に限っていたため、これは晋作の全生涯を扱ったものとしては最初期のものと言える。

渡邊の晋作伝においては、晋作の残した多くの漢詩や、獄中記などの直筆の史料、そして長州藩の公式文書など多くの原史料が引用されている。また、品川弥二郎や山田顕義など晋作と交流のあった人物たちの談話や、その他維新の関係者の語りなども多

く利用して執筆されている。江島の著作と併せて明治初期と比較すると、この時期の晋作伝は非常に豊富な史料を用いて晋作の生涯を描いていると言えるだろう。

この伝記の中で渡邊は、高杉晋作について「長藩中無比の傑士にして、其生涯実に世に伝ふるに足る」と評価している。高杉晋作の事蹟を後世に伝えることが重要な執筆動機となっていることがわかるが、伝記の冒頭の文章は次のように始まっている。

往時の志士が勤王倒幕論を唱えて、一身を犠牲に供するを顧みざりしもの、豈に閩府者流をして前政府に代らしむるが為ならんや、豈に閩府者流をして国政を玩弄せしめ、国賊をして私利を逞うせしむるが為ならんや<sup>20</sup>

ここで渡邊は当代の政治家を痛烈に批判している。渡邊にとって維新以後の政府は、私欲のために独断的に政治を行うものであり、維新の精神を受け継ぐものではなかった。それに対し維新の「英雄」たる高杉晋作を書くことで、現代の政府を批判し、人々に晋作の行動から学んで現政府に対抗する自覚を持たせることを目的としている。渡邊が晋作の伝記を描いた背景には、彼の生きる明治の社会に対する強い反発の意識があったことがわかる。先に紹介した明治8年(1875)の『評論新聞』とも共通する、現代の社会・政治と対比される維新の「英雄」晋作のイメージが描かれていると言える。

江島と渡邊の晋作伝を見ると、このふたつの伝記は、晋作伝を書くことでそれとは別の自らの主張を世に示すという手法を用いている点で共通している。晋作の伝記を執筆した背景として、江島の場合には維新以来注目されてこなかった福岡藩維新史の重要性を主張する目的があり、渡邊には現代の政治への批判の意図があった。執筆者の現代に対する問題提起として書かれたこれらの伝記が、晋作に維新の「英雄」的イメージや、社会の変革者たるイメージを与えてきたと言えよう。

同時に、彼らのこのような書き方を見ると、高杉

晋作はこの時期すでに彼らにとって自らの主張を代表させるに足る「英雄」として認識されていたことが窺える。晋作は現代社会に対する著者の主張を体現させるにふさわしい人物としてのイメージを持っていたと言え、晋作の名はこの時期すでに広く知られていたものと推測できる。

このように、明治初期から語られてきた維新史顕彰が活発化した明治中期頃には、明治初期から形成されはじめていた「英雄」晋作像を用い、時代状況を反映した著者の主張のもとに晋作伝が書かれることで、その現代観を取り入れ更なる「英雄」晋作イメージがつくられていったと言える。

また、この時期における変化として、ふたつの伝記を明治初期の晋作に関する記述と比較すると、その内容はより詳細になり、晋作自身や長州藩の原史料も豊富に用いられている。先に述べたように、明治10～20年代以降、明治政府や宮内省の編纂・顕彰事業から要請を受けて、毛利家においても歴史編纂事業が拡大された。このような中で、各大名家に残された関係史料が整理、編纂されており、晋作に関する史料もこの中で整理されていったと考えられる。明治20年代以降の旧藩関係者等による伝記においては、このような過程で整理された史料の使用が可能となったのであろう。豊富な史料に基づいた晋作研究が端緒につき、より詳細な伝記が書かれるようになってきたと言える。更にこのような流れの中で、明治初期にはいささか単純な「英雄」イメージを持っていた晋作伝が、この時期には、馬関挙兵による藩論統一や幕長戦争での勝利などが維新へと時代を動かした重要な事績として詳細に書かれた。この時期は晋作に関する歴史的評価が確かになりつつある時期であるようにも思われる。

### 2-3 明治後期～大正初期の晋作伝

以上に見てきたように、明治維新以降様々な形で維新史が語られ、その流れを受けて晋作像も形づくられてきた。徐々に語りや顕彰が活発化していく一方で、明治期の維新史編纂・顕彰には困難も付きまとった。維新を経験した者たちは未だ存命であり、

旧幕府側と薩長を中心とする新政府側の対立や、薩長政府内部の不安定さなど幕末当時の状況から発生する多くの感情や、明治にも引き継がれる対立状況等が歴史の編纂へも影響していたのである。薩長の政治家らによって批判を受けた井伊直弼銅像の除幕式<sup>21</sup>などは、そのような対立が顕著に表れたものと言える。

このように未だ生々しく残る感情から影響を受けながらも、人々の維新史への注目は益々強まっていった。明治後期に入って、維新史の編纂・顕彰はより活発に行われるようになる。それを象徴するように、明治44年(1911)には、政府が維新史編纂の組織として維新史料編纂会を発足させた。この会は井上馨を総裁とした薩長土出身者を中心とした委員たちの下、活発に維新史の編纂を行っている。また、この前後には東京上野の西郷隆盛像をはじめとし、様々な勢力による維新史の記念祭や銅像・碑の建設なども多く行われた。

高杉晋作に関する顕彰としては、明治40年代、高杉晋作顕彰碑建設事業が行われ、明治44年(1911)に下関の東行庵<sup>22</sup>において除幕式が開催されている。これは伊藤博文、井上馨、山県有朋、杉孫七郎ら旧長州藩出身の政治家・有力者たちが山口県厚狭郡郡長磯部輪一ら地方の役人たちが構成された地方委員と協力しながら行った顕彰事業である。伊藤、井上ら事業に関わった長州系の有力者たちの中には幕末期、吉田松陰の教えを受けたものも多く、また高杉晋作と共に尊皇攘夷、倒幕運動などに参加した人物達であった。除幕式で井上馨が行った演説では事業の起こりについて、「建設に就いては伊藤・山縣両公、杉・山尾両子爵、其他高杉君と親密なる交際ありし者相集まり、君の功績を後世に傳へて置きたしとの友誼上の情義より起りて」<sup>23</sup>と述べられており、事業を進める中で交わされた書簡からは彼らが事業を発起しただけでなく、中心となってそれを進めたことがわかる<sup>24</sup>。顕彰に当たった彼らの意図や、当時の彼らを取り巻く時代、社会状況の影響を受けた顕彰事業であると言える。

この顕彰碑の中で晋作は、四国艦隊との止戦講和、

下関での挙兵や、幕長戦争での勝利によって明治維新、そして王政復古の基礎を成した人物として顕彰されている。碑文に刻まれた晋作の略伝は現在の晋作伝の多くと同様の構造であり、明治中期までに形づくられてきた伝記等を引き継いで、ここでは晋作伝の構造はほぼ固まっていると言える。

更に碑文の撰者である伊藤博文は、晋作の顕彰を行いながらその文章中に自分自身がそれに関わっていたことを織り込んでいる。例えば、晋作による馬関決起の場面は次のように書かれている。

君、事の急なるを聞き、また長府に帰り、まさに諸隊を率い俗党を討たんとす、隊士等おもえらく時機尚早なりと、未だことごとく応ぜず、君余等と謀り、僅か二隊の兵を以て発し、急に馬関伊崎の官廨を囲み姦吏を逐う<sup>25</sup>

ここに登場する「余」とは碑文の撰者である伊藤博文を指している。「俗論党」打倒を目指し兵を挙げた晋作に、奇兵隊をはじめとする長州藩の諸隊は時期尚早であると応じず、晋作は伊藤とともにわずか二隊の兵を率いて伊崎の会所を襲撃したという、先に紹介した晋作伝のハイライトとも言える事績が書かれている。

青山忠正氏は著書『高杉晋作と奇兵隊』の中で碑文について触れ、「このストーリーは、現在に至るまで、高杉伝と言わず、長州藩幕末史の定説になっているようだ。」<sup>26</sup>と述べている。この馬関決起の場面も、奇兵隊をはじめ多くの者が反対し味方の少ない中、先見の明を持った晋作がわずかな兵を率いて挙兵を成功させたという、この後現在に至るまで晋作伝を彩る重要なエピソードになっている。伊藤ら政治家たちは自分たちの功績の主張と言う目的を重ね合わせながら、晋作を維新の基礎を成した「英雄」として描き、後世に伝わるイメージをつくりだしたと言える。このようなモチーフは伊藤博文、山県有朋らが、この顕彰碑以前に度々行ってきた維新期の回想談等の中にも共通して表れており、この顕彰碑は彼らのそのような語り方を形として後世に残したも

のであるとも言える。長州系の有力者たちの維新観や意識は晋作像形成に大きく関わっていることがわかる。

このように、明治後期に入ると明治政府の中核を成した長州出身の政治家たちにより行われた晋作顕彰によって、それまでに作られてきた晋作像をもとに、その後現在まで語られる晋作イメージの基礎が形作られた。

更に、大正に入ると晋作の顕彰は一段と活発に行われるようになる。まず大正3年(1914)には新たに晋作の伝記として、村田峰二郎著『高杉晋作』が刊行された。著者の村田は毛利家の歴史編纂事業の編纂員を務めた人物である。その立場を活かして晋作や長州藩に関する豊富な史料を利用し、詳細な晋作伝を記している。

村田はこの本の中で執筆の目的について次のように述べている。

是れ啻に高杉君の為に図るにあらず、先づ深遠なる維新皇業の淵源を証積し、併せて君の雄偉なる行実を赫耀せは、士気靡頹の今日に於て、許多の頑士懦夫をして、感奮激励せしめ、遂に一世の英風を作振するを得て、世教を裨補するもの洵に多大ならずや<sup>27</sup>

これによれば村田は、晋作の伝記を書くことは晋作の顕彰のためだけでなく、晋作の偉大なる事績を編輯して世の中に伝えることによって維新の淵源を明らかにし、併せて士気頹靡の今日の人々を鼓舞することが世のためとなるとしてこの伝記を執筆している。明治初期以降あった、現在の人々を鼓舞しその手本となる晋作像がここにも表れている。また、村田の伝記においても晋作の事績は維新の「淵源」つまり基礎となったとして評価されており、現代に続く晋作への歴史的評価が定まっていることも窺える。

更に村田の伝記においては、晋作だけでなく長州藩維新史に関する史料を多く引用して、晋作伝を中心としつつも長州全体の維新史を描いているという

点が特徴的である。江島が福岡藩の維新史を晋作の伝記によって世に広めようとしたように、長州藩毛利家の歴史編纂員を務めた村田は高杉晋作を代表として長州の維新史全体を世に知らせようとするような書き方を取ったのではないかと推測できる。維新の勝者とも言える長州藩の出身者により、豊富な史料や回想談を用いて書かれたこのような晋作伝によって、晋作伝だけに留まらず青山氏の言うような「長州藩維新史の定説」にまで至るストーリーが形成されていった。

村田の伝記から2年後の大正5年(1916)は高杉晋作の没後50年にあたる。この年、東京の靖国神社において没後50年を記念した東行先生五十年記念祭が行われている。この式典は毛利家の主催によるものであったが、事業の遂行は木戸孝正を委員長とし、長州系政治家・軍人で構成された東行先生五十年祭記念会が中心行的に行った。

この記念祭においては、式典の開催に合わせて晋作の遺品遺墨展覧会が同じく靖国神社の遊就館で開催された。晋作の旧知の人々や維新の関係者の多くより出品物を集めたこの展覧会は、晋作に関する大規模な展示としては初のものであった。またこの時、晋作の初の全集である『東行先生遺文』も刊行されている。これは毛利家の編纂員などにより編集されたもので、晋作の伝記や、詩歌文章、日記など多数の史料が収録されており、戦後に次の全集である『高杉晋作全集』<sup>28</sup>が刊行されるまで高杉晋作研究においても広く利用されるものとなった。この記念祭が晋作研究や晋作に対するイメージに大きく影響を与えるものであったことがわかる。

記念祭の行われた大正5年(1916)には、村田と同様に晋作の全生涯を記した伝記である横山健堂著『高杉晋作』も刊行された。

著者の横山は明治5年(1872)に萩に生まれ、後にジャーナリストとして活動した。先に紹介した『東行先生遺文』編纂にも携わっている。

冒頭に書かれた執筆の経緯によれば、横山の父親は元松下村塾の生徒で、横山は家にあった当時の事を書き残した父の随筆をもとにしてこの本を執筆し

た。また、晋作の未亡人・知友の在命中のものに話を聞いたことや、毛利家編纂所の史料等とともに、同年の東行先生五十年記念祭に際して世に出た史料や遺品遺墨展覧会に陳列された遺墨遺稿などを研究して伝記を書いたことが述べられている。村田の場合と同様に、豊富な史料を用いて詳細に書かれた晋作伝である。

この本の中で横山は高杉晋作を「青年の模範」とであると書いている。横山にとって当時の社会は「老人中心」であり、また青年側もそれに甘んじている状態と捉えられていた。横山は晋作の伝記を書くことによって、人々、中でも特に青年たちを、晋作を手本としてこれからの世を担う人物となるよう鼓舞することを望んでいる。

また、横山は伝記執筆の目的のひとつとして、晋作が従来世間に誤解され、誇張されてきたことを述べている。横山によればそれまでの晋作イメージは、明治維新の「英雄」のひとりである一方で、その奇抜な言動や激しい活動の方ばかりが目されるが多かったという。そのような評価を踏まえ、横山は晋作を次のように評価している。

(高杉は※筆者注)日本の民族性を表現した大人物であったのだ。

高杉が忠孝両全の信条を以て終始一貫したのは、注目す可き事である。(中略)

彼は君に忠なるは則ち親に孝なる所以と信じて居た。(中略)彼は、此の大信念を以て大事に当つた。彼が忠孝両全の態度は、則ち日本人の美点を發揮した所以であった。<sup>29</sup>

ここで横山が強調しているのは晋作の激しく奇抜な一面ではなく、忠義に篤く日本的な、まさに「青年の模範」となるような晋作のイメージである。横山は晋作のこのような一面を範とし、青年たちが国家を担う国民へ成長していくことを望んでいる。横山の晋作伝においては、これまでに注目されてきた奇兵隊や馬関決起などの晋作の事績そのものに対する評価だけでなく、その人格や精神面に関する評価

を高くしている点が特徴的であると言える。そして、これまでに旧藩関係者が語ってきた、自からの藩史や維新史の主張、顕彰を交えたどちらかと言えば「地域」的な晋作像から、より「国家」的な、国民の「英雄」としての晋作像へ移り変わってきている様子を窺うことができるように思われる。

## 2-4 昭和～現代の晋作伝

以上、明治後期から大正期の晋作顕彰の状況を見てきた。明治後期には、維新史全体の顕彰活発化の流れに沿って晋作顕彰もより一層活発化した。特に、それまでに形成されてきた晋作イメージを引き継ぎつつ、晋作の旧友である長州系の政治家たちによる顕彰が行われ、それらが晋作像に与えた影響は大きいものであった。また、顕彰の中で初の全集である『東行先生遺文』がつくられるなど史料の整理等も更に進み、これまでになされた長州出身者の談話や回想録とも併せて、豊富な史料を用いて晋作の生涯がより深く詳細に描かれるようになった。これらの晋作伝は現在まで続く高杉晋作伝、研究の基礎ともなっている。

更に、大正期以降は、それまでの長州出身者による維新の基礎を長州にあるとする地域的な語りから、徐々に国民全体の英雄としての晋作イメージが形成されていく傾向にある。この後、日本が徐々に軍国主義、戦争の時代へと向かっていく中でそのようなイメージは更に強くなっていくこととなる。

晋作イメージ概観の最後に、昭和から現代にかけての晋作像を簡単に見ておきたい。昭和に入ると晋作を題材とした小説等も多く書かれるようになり、晋作イメージは益々一般に広まっていったと言える。しかし、戦前、戦中にはその時代・社会状況の影響を強く受けた。

昭和18年(1943)に刊行された晋作の伝記である、和田健爾著『高杉晋作 志士の精神』を見てみよう。内容は二部構成となっており、前半は「高杉晋作の生涯」と題して晋作の生涯を描いたもの、後半は「高杉晋作の思想」と題し晋作の書簡や詩歌が紹介されたものとなっている。特に前半の伝記部分を見ると、

その構成は先に見た顕彰碑の碑文等とおおよそ同様であり、これまでに形作られてきた晋作伝を受けて執筆されていることが窺える。

この伝記において著者は、高杉晋作の生涯と思想を、「国史の流れの中に把握して」<sup>30</sup> 描くという方針で執筆を行っている。高杉晋作個人への注目だけでなく、その存在を歴史の流れの中に把握するというスタンスは、戦後の伝記の中で晋作の事績を客観的に評価するために必要であるとされた手法である。このような点からは戦後の研究へつながる流れを見出すこともできるように思われるが、一方でそこに描かれた晋作像はやはり戦時下の社会から影響を受けたものであった。

和田はこの伝記の中で、高杉晋作の事績について、「先師松陰の遺志継承発展せしめて、一意、尊皇殉国の至誠を貫ぬき、神州正気の激揚につとめた赫奕たる偉業」<sup>31</sup>と表現しており、晋作を天皇の為にその身を擲った優れた人物として評価している。戦時の皇国史観の影響を強く受けたものであることは明らかである。

更に、和田は晋作伝を書くことの目的を次のように述べている。

希ふところは、この大いなる国史の躍進期に際して、草莽一億の同胞が、この志士の精神の中に「みたまわれ」(御民われ※筆者注)の自覚と矜持とを悟覚して、一そうその鉄腸を養ふよすがともするならば、筆者の欣快これに過ぐるものはないのである。<sup>32</sup>

ここに表現されているように、この伝記の背景には高杉晋作を書くことで国のため、天皇のためという精神を持った「御民=天皇の民」を創り出す意図があり、天皇制国家の下、戦意高揚のために晋作を「英雄」として描いていると言える。大正初期より国民の「英雄」として語られる傾向を強めた晋作のイメージは、このように戦時下の皇国史観の影響を受け、更にそのイメージを強めていったのである。

戦前、戦中期には晋作だけでなくその他の維新志

士関係の銅像や碑の建造も多く行われた。明治維新の「英雄」たちは戦意高揚に大きな効果を生む存在であったのであろう。このように、明治後期に続いて活発に晋作が語られたこの時期もまた、晋作の「英雄」イメージ形成に大きく影響を与えたと言える。

以上に見てきたように、明治初期から様々な人々によって語られてきた晋作は、昭和期頃には長州と言う地域の「英雄」から、国民の「英雄」へと転換しており、戦時中には皇国史観の影響を受けそのイメージがピークに達した。過剰に「英雄」的に語られ、戦意高揚に利用されることともなった晋作像は、先に述べたように戦後の研究で大きく改められることになる。晋作にまつわる逸話や伝説は事実と区別されるようになり、幕末と言う時期全体の歴史の流れや、晋作の生きた社会の状況と晋作個人を関わらせ、負の面にも光を当てたより人間的な晋作が検討されるようになった。

一方で、戦後の高度経済成長期には幕末ブームも起こり、小説やドラマなどで晋作が描かれることも更に増えた。司馬遼太郎など大衆に多く読まれる小説<sup>33</sup>や、ドラマ等によって晋作の名は現在も広く民衆に知られている。これまでに形成されてきた晋作像を引き継ぎつつ、現在では晋作像はより多様なものとなってきていると言えるだろう。

### 3. 高杉晋作伝形成の概観

明治初期から現在までの高杉晋作像について伝記を中心としてその変遷の大まかな流れを見てきた。

晋作の名は死の直後から人々の間に語られ、明治初期にはすでに「英雄」晋作イメージが存在していた。その後、政府や宮内省による贈位や維新史編纂事業と、それに関わりつつ行われた旧藩関係者などの編纂・顕彰事業によって晋作研究も端緒に就き、人々の様々な意識や時代状況を反映して晋作のイメージが形成されていった。このようにしてつくられてきた晋作イメージを取り込みつつ、明治後期から大正初期に長州系政治家たちを中心とした顕彰が活発化すると、彼らの行った事業の規模や彼ら自身

の立場による影響力の大きさから、現在の研究や晋作像へと続く、晋作伝の基礎がつくられたと言える。その後の戦前・戦中の皇国史観の影響下での顕彰の再活発化を経て、現代まで晋作の名が語り継がれてきた。

晋作像の形成過程にはここに取り上げた以外にも多数の存在が影響を与えており、本稿では未だ大まかな流れを示したにすぎないが、ここに見られた晋作伝の変遷について現在考えられる特徴をまとめておきたい。

まず、晋作伝の構造は明治30年(1897)頃までにおおよその形がつくられているようである。そして明治44年(1911)の顕彰碑のストーリーが長州藩幕末史の定説と言われたように、明治後期から大正初期に行われた旧長州系政治家や長州出身者たちを中心とする顕彰によって語られたストーリーが現在までの晋作伝の基礎を成している。

これらの伝記や顕彰においては、毛利家の歴史編纂事業によって整理・編纂された史料が多く用いられており、明治10年代以降政府や宮内省の事業に伴って維新史の編纂が進められてきた流れに沿って、晋作伝も史料を用いた詳細なものとなっていった。一方で、原史料とともに伝記執筆に用いられているのは、晋作の関係者たちの回想や談話である。明治期には伊藤博文や山県有朋など維新を経験した政治家たちが多く維新の回想談を行った。この中で語られたことは原史料にない晋作の当時の様子やその心情を補う貴重な史料であったが、一方でその語り手の主観に左右されることもあった。伊藤や井上、山県らの語りは彼らの政治的地位の高さから広く用いられた語りであり、顕彰碑のストーリーとも共通するものがある。顕彰碑が「定説」と言われるほど強いイメージを持っているとあわせて、このような政治家たちによってつくられたイメージが晋作像の形成に特に強い影響を与えたものという事ができるだろう。

また、伝記の著者による晋作伝の執筆動機を見ると、明治初期から昭和期に至るまでの各時代の晋作顕彰の目的の多くには、晋作の伝記を刊行する

ことで民衆を鼓舞するという目的が見受けられる。伝記において晋作は時代毎に求められる要素に変化はあるものの、おおよそ人々、特に青年を鼓舞し、その模範となる人物として描かれてきたと言えるだろう。

一方で執筆目的や刊行の背景には、時代や作者による違いも見られる。明治初期には『評論新聞』や渡邊修二郎の伝記に見られたような現代社会への批判としての晋作伝など、維新の変革をもたらし、また新たな世をももたらす「変革者」的なイメージの晋作像が語られた。また、江島や旧長州藩出身者による語りにおいては、晋作は維新の基礎をつくった人物であるとの歴史的評価の確立と、そこに自らの地域の歴史を重ね合わせることによって、その功績を代表させる地域的な「英雄」として語られる面があったと言える。しかし、明治後期から大正初期にかけて、靖国神社で行われた晋作没後五十年祭にも表れているように晋作像は徐々に国家的「英雄」像へと変化していく。横山健堂の伝記で「青年の模範」として評価されたように、この段階では晋作の事績だけでなく、晋作の持つ忠孝や勤王という精神面がより強調して描かれるようになっていく。そして昭和に入り戦争の時代に突入すると、そのイメージは更に強化され、晋作は天皇のためにその身を擲って働いた「英雄」として語られていく。地域的「英雄」像から、天皇制の下国民をまとめていく国家的「英雄」へとイメージは変遷していったと見る事ができるだろう。

このように、晋作伝は明治以降様々に変遷してきた。そこには各時代に行われた維新史編纂・顕彰の流れ、そして近代日本の時代・社会状況が反映されている。各時代の様々な状況を受けてつくられてきた晋作像は現代にまで影響を与えていると言えよう。

## おわりに

本稿では、高杉晋作イメージがどのように形成され、変遷してきたかという点について、明治以降の伝記を中心に、執筆者・顕彰主体の意図や、そこに描かれた高杉像を検討することでその概観を示し

た。晋作に関する語りは多様であり、詳細な変遷過程を知るためには今後もより多くの晋作伝・顕彰活動について検討していかなければならない。本稿で取り扱ったのはほんのわずかな部分ではあるが、大まかな流れをつかむことで今後の課題も明確になったのではないかと考える。

晋作像の形成に影響を与えた存在として、伊藤博文や山県有朋ら長州系の政治家たちの存在は大きい。彼らの行った顕彰活動の実態とともに、彼らの持っていた維新観や現代観がどのように顕彰と関わっているかを調査することは晋作像形成を考える上で重要な課題である。また、晋作像の形成最初期である明治初期の晋作像の収集や、明治後期から大正初期に告いで顕彰が活発に行われた昭和期の晋作像も興味深い対象である。

また、本稿では伝記を中心に検討したがそれ以外にも注目すべき語りは多く存在する。先に述べた横山の伝記では、世間において晋作の奇抜で激しい行動が注目されていることが述べられていた。また和

田健爾『高杉晋作 志士の精神』の中でも、和田は晋作を「憂国の至情にもとづく純粋な青年」の心を持って活動した人物というように評価した際、「世人は、とかく高杉の陽剛をいひ、頑烈を挙げて、彼を何か武勇伝風の暴客の如く評し去るものがある」<sup>34</sup>ことを述べている。ここに表れているように、世間では晋作を奇抜な、時には暴力的な人物として見るイメージも存在していた。

一坂太郎氏がその研究の中で述べているように、晋作は「英雄」的に語られる一方で、維新以後長州藩において武士身分を失ったものたちにとっては「秩序の破壊者」<sup>35</sup>でもあった。明治維新直後、長州においては、晋作に対する負のイメージも語られていたようである。このように本稿で見てきた晋作像以外にも、民衆の持っていた晋作像は存在していたものと思われる。このような側面についても考慮しつつ、晋作像と各時代との関わりを見ていかなければならないだろう。以上のような課題を踏まえ、今後とも検討を続けていきたいと考えている。

#### 【注】

- 1 毛利家の歴史編纂事業については、広田暢久「毛利家編纂事業史(其の一)～(其の四)」(『山口県文書館研究紀要』第3・6・7・8号)を参照している。
- 2 奈良本辰也『高杉晋作』(中央公論社、1965年) iii～iv頁
- 3 前掲、奈良本辰也『高杉晋作』iv頁
- 4 一坂太郎『高杉晋作』(文藝春秋、2002年) 229頁
- 5 前掲、一坂太郎『高杉晋作』 227頁
- 6 伝記としては、梅溪昇『高杉晋作』(吉川弘文館、2002年)、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』(吉川弘文館、2007年)などがある。
- 7 前掲、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』 212頁
- 8 前掲、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』エピソード
- 9 前掲、一坂太郎『高杉晋作』
- 10 新聞集成明治編年史編纂会『新聞集成明治編年史』第13巻(財政経済学会、1936年) 456～457頁
- 11 前掲、一坂太郎『高杉晋作』 4頁
- 12 河邨敬一郎『近世正義人命列伝』(1875年)
- 13 下線は筆者による。
- 14 日比野利信「維新の記憶—福岡藩を中心として—」明治維新学会編『明治維新と歴史意識』(吉川弘文館、2005年)所収
- 15 『入筑始末』では早川勇が序文の寄稿も行っている。
- 16 この一件は乙丑の獄と呼ばれる。
- 17 江島茂逸『高杉晋作伝入筑始末』(圓々社書店・陽壽館、1893年)序・凡例12頁。  
点は筆者、変体仮名は現在の仮名遣いに直した。
- 18 中岡慎太郎の変名、石川誠之助。

- 19 前掲、江島茂逸『高杉晋作伝入筑始末』 120頁
- 20 渡邊修二郎『高杉晋作』(少年園、1897) 1頁
- 21 明治42(1909)年、田彦根藩有志により井伊直弼銅像が建設され、横浜開港五十周年にあわせて除幕式を執り行おうとしたところ、薩長の政治家たちに中止を求められた一件。(『東京日日新聞』明治42年6月27日付)
- 22 晋作の墓所。
- 23 「七友高杉を思ふ」(『防長新聞』1911年5月23日)
- 24 事業の経緯については、拙稿「高杉晋作顕彰碑とその背景」(『山口県地方史研究』第110号、2013年)参照。
- 25 原文は漢文である。
- 26 前掲、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』 3頁
- 27 村田峰次郎『高杉晋作』(民友社、1914)序4頁
- 28 堀哲三郎編『高杉晋作全集』(新人物往来社、1974年)
- 29 横山健堂『高杉晋作』 6頁
- 30 和田健爾『高杉晋作 志士の精神』(1943年、京文社書店) 3頁
- 31 前掲、和田健爾『高杉晋作 志士の精神』 187頁
- 32 前掲、和田健爾『高杉晋作 志士の精神』 3頁
- 33 司馬遼太郎『世に棲む日日』など
- 34 前掲、和田健爾『高杉晋作 志士の精神』 2頁
- 35 前掲、一坂太郎『高杉晋作』 227頁